

○山口 潤一郎¹

¹早大先進理工

もう 10 年も前となるが、博士を取得した後、2007 年 4 月に米国サンディエゴにあるスクリプス研究所へ留学した。日本学術振興会の海外特別研究員として、当時若手のホープであった Phil S. Baran 教授（当時は准教授）のもとで有機合成化学の研鑽を積んだ。海外で働くことは研究者として大学で働くことを決めてからの夢であり、加えて自分の力を試したいということもあった。幸いにも、研究は順調に進み、数報の論文を出すことができた。その結果からか、1 年半の滞在の後、名古屋大学に助教として帰ってくることとなった（伊丹健一郎教授）。滞在中は多くの経験（化学以外にも生活や文化の違いなども含む）を得た。しかし、いま考えてみると、そこで得た化学の経験以上に、研究者同士の人的な交流が私の研究生活の糧となっている。同時期に海外に留学していた日本人研究者や、当時の学生は、多くが国内外のトップスクールで大学教員となり活躍している。

本発表では、思い出話のようで取り留めのない話になる気がするが（なかなかこのような話を外にする機会はない）、当時に出会った研究者達と、その後の人的交流と研究について時間のある限りお話ししたい。